

# 立派な施設ではなく 1カ所で済むサービス

少子高齢化問題は相変わらず深刻となっている。国立社会保障・人口問題研究所によると、高齢世帯の総数は05年から25年まで40%以上増加すると推計されている。さらに、ライフスタイルの多様化で、終の住処をどこで過ごすかは、他人事ではなく、自身の問題としても大きな社会的課題。そのような背景の中で、高齢者のニーズに合わせた福祉施設の研究を行っているのが、東北工業大学（太白区）工学部建築学科の石井敏教授だ。

高齢者の住まいと介護サービスは、老人ホームなどの「施設サービス」とデイサービスセンターなどの「居宅サービス」がある。石井教授は、これらのサービスについて、「高齢者のニーズに応え、安心して利用できるためにはどのような環境をつくらなければならないか」というテーマで、主に建築の立場から取り組んでいる。

石井教授は、03年に社会福祉法人元気村南方グループホーム翔裕園（登米市）の基本計画・基本設計に携わり、04年から06年までは（株）学研ココファン（本社東京都品川区）で、

介護サービスへのアドバイザリー契約を結び、同社の設立にも参画。たとえば、ココファンレイクヒルズは計画前段階から関わり、事業のコンセプトづくり、住宅とサービスとの連携のあり方、施設（住宅）の環境づくりの方針などについてアドバイスをを行った。このほか、市民センターでの講座や高齢者福祉施設職員の研修でも講師を行うなど、積極的に取り組んでいる。

石井教授は元々大学で医療建築を専攻、終末期ケアを行うホスピスに接してから人の最期を暮らす場所のあり方を考えるようになった。北欧のフィンランドに留学した際には、その社会保障の充実ぶりに感銘を受けた。そこで、日本でもフィンランドの社会福祉水準に近づけられないか考え始めたことが、この取り組み



石井敏教授

適合高齢者専用賃貸住宅にショートステイ、デイサービスも組み込んだココファンレイクヒルズ（東京都）。設計は積水ハウス



を始めるきっかけになったという。

## 小規模多機能施設は 仙台市では7カ所だけ

高齢者福祉施設の設備は、ここ7〜8年程度で改善されたが、まだ不十分だと石井教授は言う。バリアフリーや施設の充実が大事なことで、あまりに行き過ぎたバリアフリーは、いかにも「施設」というイメージがあり、高齢者が安心して利用できる場合があるという。

石井教授が注目しているのが、デイサービス、ショートステイ、訪問介護を一つの事業所で行うことができる「小規模多機能施設」だ。地域密着型で小規模な事業所で行うこと

ができることから、小回りのきくサービスを提供することができ、利用者側も異なるサービスと同じ職員から受けられることから安心感を得られる。立地も自宅からも近いので、通所も容易になるなど、メリットは大きい。

しかし、本来なら中学校区に1、2カ所必要といわれる同施設も仙台市では7カ所だけで、他都市と比べ遅れているのが現状。この遅れは10〜20年後に差が出てくるという。

「豊かさとは、安心してサポートを受けられ、普通に暮らせること。高齢者福祉施設は、利用者が落ち着く場所であることが大事で、立派な施設である必要はないのです」と石井教授は語る。

今後さまざまな問題に対して、施設の設計者や運営者と一緒に解決策を講じていくほか、産学連携についても機会があれば実践していく方針だ。

👉 **ここがツボ！**

- ◎フィンランドの福祉を手本に
- ◎仙台市に遅れ、差は十数年後に表面化
- ◎利用者が「普通」に暮らせること